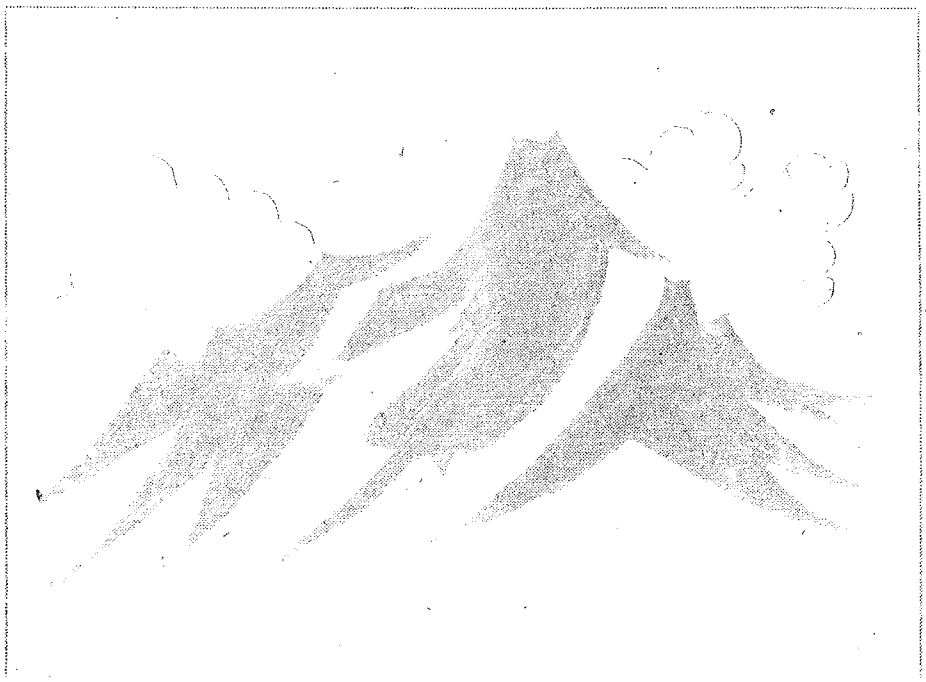
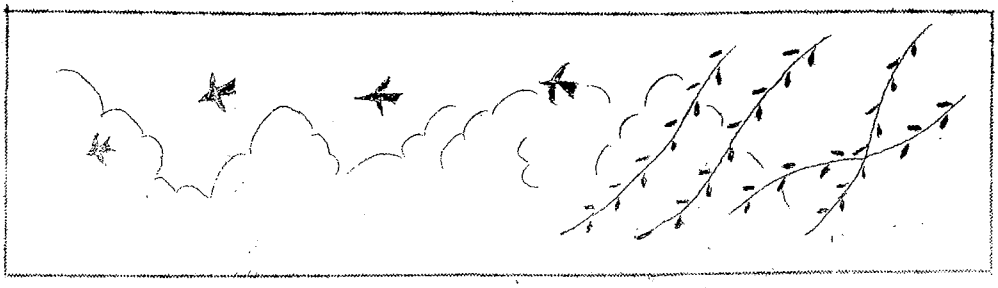
彷徨

第四号

昭和25年9月



都立西高等学校山岳部



彷徨

第四号

西高山岳部

―目次―

西高山岳部の発展……三C笹野幸夫（一）
国体予選参加と決定……（一）

―例会記録―

乾徳山……二E中野（二）
奥秩父主脈縦走……二E田中（将）島（二）
富士山……三A神島（二）
笛吹川……二E中野（六）
北アルプス縦走……三C笹野（六）
尾瀬沼……二A笹田（八）
ゴシップ……一C岩堀（一二）
今井君遭難について……二E田中（将）（一四）
高士雑感……二E田中（一四）
現役OBコンダン会……三C笹野（一五）
歩行……二E中野（一六）
我々の知識　地学教室……二B森沢（一六）
ゴシップ……三C笹野（一七）
金剛杖……二A笹田（一八）
ことばとはなし……三C笹野（一八）
二E田中（実）（一九）

―個人山行―

塔ヶ岳……二E田中（将）（一九）
越上谷……二D村田（一九）
上高地、西穂高……三A神島（一九）
御岳、大岳、御嶽……三A神島（二〇）
南秋川の旅……二E田中（将）（二〇）
谷川岳……二G竹内（二一）
大菩薩……二F佐藤（二一）
御前山より御嶽、五日市……二E田中（実）（二一）
飯上ガイド……（二一）
部員名簿……（二二）
山岳部備品……（二二）
各係割当制へ……（二二）
後記……（二三）

以上

―西高山岳部の発展―

度毎によく見直し　その良否を考へ、以後歩まんとする果しなき径に向つて改めることをこの頃こつ。

＝西高山岳部の発展＝

来年に期待

三C　笹野幸夫

憩いの一時、そして我等のよき試練の一時……今年の夏休みも終りを告げ、灯火親しむべき候ともなった。この新しき学期を踏み出すにあたり、現在までのそして休暇中の部活動を振り返り、反省し、今后のよき参考にして行きたいと思う。

恥出しの何か漠然としたものを感じていた我が部は　今年度二年生諸兄の活躍で確に厳然たる足跡を示す様になって来た。先ず山行回数が増したことは部活動の活発化を表わすものであるが、それにもまして部内がまとまり全員が積極的に協力し合う様になって来たのは嬉しいことだ。私の最も欲しているのは部内融合なのであるから、しかし現在のそれも必ずしも満足出来るものでないことは明らかである。これを一層進めてまとまった楽しい部に発展していく様今后心掛けていたゞきたい。

又夏休中の山行を反省してみるに、今年はやっぱり散漫に過ぎた感がある。これも一つの試みであったのだが、合宿等部員全体が参加するものを一切やめ、多くの山行を計画して但々好む所に参加する方式を取ったのである。しかしこれは結果からみて失敗ではあった。部全員が共に山に楽しみ、山を研究することの出来なかったことは本当に残念である。こういう点から今夏に於ける山行を深く反省し来年の計画に供して行きたい。そして来年度こそ我が西高山岳部のよりよき発展を見る時だと云って過言でないことを私は信ずるものである。

何事でも反省あってこそ始めて発展をみるのである。私は山に於て最も深き反省を得ることが出来ると云うことを云ったことがあるが、この山を愛する我々にとって反省は最も尊厳すべきものではなかろうか。我々の歩み来った径へ（これは必ずしも巾広き道ではない）を高い所に登る度毎によく見通し　その良否を考へ、以後歩まんとする果しなき径に向って改めて出発して行こう。

なくて八月二十日の総会により我等の部報名を〝彷徨〟と定めたことは意義あるものであり、こゝで皆様に御了解を得るものである。

尚、部報が少しレポートの形に傾いている感があるが、そう是正する必要はないと思う。だが山行報告はあくまでも報告としてあるべきもので散文的にはならないで欲しい。そして山をもっとあらゆる角度から極めて行ってもらいたい。

最后に長い休暇も終った現在各人種々の思い出があることゝ思うので、二学期早々放課后でも利用して懇談会を開き、大いに語り合う計画をしていますので、是非とも多数参加される様おねがいしておきます。尚、今回O.B会の結成を見ることになりましたので、卒業生と在校生との融合をはかるため、この懇談会にO.Bも出席してもらうべく様考えてあります。

国体予選参加と決定

国民体高大会東京都予選は来る九月二十三、二十四日の両日丹沢山塊にて行われますが、部では去る九日の集会で、これに参加と決定　参加者を次の通りほゞ決定いたしました。

L O B安　孫

一E　田中　実　　一D　加藤鈴夫

二E　鈴木輝夫　　一H　野口弘生

―例会記録―

乾徳山

二E 中野英司

〔期日〕 七月十六日(前夜発日帰)
〔天候〕 晴時々曇
〔参加者〕 二E鈴木輝雄、中野英司
〔コースタイム〕
新宿発(午前〇、〇五)―塩山(三、四八―三、五五)―窪平(四、五五)―馬込乾徳山入口(六、二五―六、三〇)―徳和山登山旅館(七、一〇 すいかん八、四五)―水場、金扇氷(一〇、四五―一一、二〇)―廻平(一一、三五―一一、四五)―乾徳頂上(一二、三〇―一二、四五)―山登旅館(三、〇〇―三、四五)―馬込乾徳山入口(四、三〇―四、五五)―バス―塩山(五、四五)―塩山発(六、一九)―新宿着(九、二八)
〔費用〕 新宿―塩山 往復一八〇円(学割使用)
塩山―バス馬込乾徳山入口 片道三五円
〔後記〕
男性的な好展望の山、乾徳へと胸をおどらして出発、奥秩父主脈縦走の連中と同じ夜汽車、車中で一時間許り寝た。鈴木は寝られなかったらしい。塩山から窪平迄ランタンをともしてもくもくと歩く、笛吹川を渡る所でやっとうす明るくなる。徳和迄鈴木大分苦しそうだったが、ともかく山登旅館迄行き食事の后二人共寝てしまう。オソバ沢の登りはなかなかの急坂。駒止富士なる所での富士を見ようと期待したが駄目、風はそよそよと実に気持ちがよい、ガイドブックの水場で食事、水がつまり一キャンプに好適、このあたりから屋根上迄の廻平なる所は実にすばらしい。パッと目の前がひらけなだらかな針葉樹は一面の苔、この中に赤、黄、紫などの色とりどりのお花畑である。この上にひらひらとちょうちょうが乱飛んでいる様は何とも云いようがない。

美しい牧歌がひびいて来る様である。カッコウが盛んに鳴いている。鈴木と二人で恍惚と時のたつのも忘れる。霧が湧り上って来て、その中に特徴のある乾徳の頂上は目の前、ここから岩である。こゝで鈴木今まで苦痛をうったえていたのにがぜん元気となり、岩の上を飛び移に登って行く、天地の割岩、鐵岩、ひげすり岩などすぎて三ヶ所の鎖場を登って頂上、この岩の頂上での展望を楽しみに来たのになんたる事、一面の霧でわずかに目の前の大鳥山が見えるだけ、寒にたえずくしてきたので下りにかゝる。こゝまで二人づつ(アベックではない)五組の登山者に会っただけ、道高尾根はものすごい下り、ツツと云う間に徳和、ひざはガクガクを通り越して硬張って歩きにくい。山登旅館でのお茶は実にうまい。あとはバスでのんびりと馬込、展望は駄目だったが、廻平のお花園に満足して

―完―

〔参考〕 バスは日に三く四往復
〔反省〕 第一にタイム表には表はしてないが休息のあまりに多すぎた事である、これは僕も雲取山でバテた事があるので大口は云えないが、鈴木がバテた原因だろう。第二は彼が夜汽車で寝れなかったためである。前夜発日帰はどうもこう云う事を招きやすい。充分注意しよう。

奥秩父主脈縦走

◇期日 七月十六～十九日 三泊四日
◇参加者 L神崎一郎(3A)田中将利(2E)森沢利治(2B)以上三名
第一日
○天候 晴夜雨
○コースタイム
新宿発(〇、〇五)＝小淵沢(六、四〇)―川上着(八、四五)―御所平(九、〇〇)―

休憩(九、五〇―一〇、三〇)―信州峠(一一、一五―一二、三〇)―東森(一三、三〇)―休憩(一二、四五―一三、三〇)―金山峠(一四、四五―一五、〇〇)―金山(一五、三〇)

湘南一郎記

○宿泊は金山有井館

費用　新宿―川上　一四〇円　金山宿料　一〇〇円　笠取小屋　一〇〇円、川野―氷川　五〇円　氷川―高円寺　九〇円

終列車に乗ろうと九時頃新宿駅に行く。乾徳山へ行く中野、鈴木の両君は来ていたが、同行の田中、森沢は未だ来ていない。今日は土曜日なので、すでにホームは溢れるばかり到底空れそうもないので零時五分のアルプス号に乗る、座席は運よくとれ窓から覗へ行くと云う大原高校の方と一緒になる。塩山で乾徳行の二人に別れてからも賑しやっている僕等はほとんど寝ら れず早くも夜が明けるのが待たれる。韮崎では朝日を受けて黄金色に輝く甲斐駒や鳳凰に観声あげ、小淵沢で大原高校の方に別れを告げて前代の遺物のような小海線に乗換へる。一時間程待って七時十五分に発車する。汽車は白樺や落葉松のはへた八ヶ岳の雄大な裾野をのろ〳〵と行く。それでも日本最高の駅と云われる野辺山駅へ一三四六米)を過ぎてからは、スピードを増し、八時四十分信濃川上に着く、すぐ御所平に向って出発する。間もなく羊腸に導かれて信州峠へと石折し、原部落からの道と合してからはトラックの通う様な広い道を行く、ふりかえれば特長のある男山岩峰が見え、右には対象的ななだらかなカヤトの女山が眺められて中々よい。空腹を感じたので萱ダワから流れを発する白トコ沢の附近で朝食をとる。こゝで婚のエドロッテンばりの瑞牆山が突兀として見える。こゝから大したきつい登りもなくカヤトや樺木の中を行くこと一時間足らずで信州峠に着く、こゝは眺望は悪すぐに明るい信州側に対称的な暗い感じの道を東森に向う。峠を降り始めると瑞牆の大やすりがよく見える所がある。樹林の中の歩きより道を一時間ばかり下るとラチオの聞える東森の部落に着く、こゝから金山迄は瑞牆山の麓を行くのんびりした道だ、東森の先で中食を取り松平牧場へと入る。尺山の牛馬に合う事を予想していたが、一匹の馬にも合う事もなくベンチのある金山峠につく、こゝから明日登る金峰への道が左に別れている。それからほんのわづかの降りで今晩の宿金山の有井館に着く、正面に金峰の頂上や大日岩が見えて、中々よい所だが蠅と蚊の多りのには閉口した。丁度金山に着いた頃から天候が急に悪化し夕方には明さへ降り始めた。出発する時天気予報も天気の下り気味を報じていたので俄然憂鬱となり明日からの主脈縦走等おぼつかない様な気になり、はては水晶峠を越えて出直おそうかと云う説が出たが金峰だけは登ろうと云う事になり不安な気持で九時頃床に就いた。

第二日

金山(六〇〇)―金山峠(六、二五―六、四〇)―一、遠土見平(七、一七―七、四〇)―大日小屋(八、二五―八、四五)―大日岩上(分岐(九、〇〇)―大日岩(九、三〇―一〇、一五)―金峰山(一一、〇五―一二、五五)―朝日岳(一五、五)―朝日峠(一二、五―一二、三〇)―大弛小屋(一三、二五)

五時に森沢に起されて外に出て見ると、空は晴れて望が聴いている。昨日の疲労はたちまち消滅んで急いで用意にかかる。丁度六時に出発する。右手に金峰の岩峰を眺めて下り金山峠に登り、こゝで朝食をとる。ここから昨日未だ道と別れて、右に樹木林の中の道を行く。間もなく里宮平で、富士見平への道は但当に急である、清水のある所を越すと、瑞牆山への道と別れている富士見平につく。たしかに、その名に恥ず富士が聳いの外大きく正面に見え、その右には雲海の上に南アルプスが、白峯三山始めの怒涛の如く連なっている。飯盛山の南をまく ほとんど平な樹木下を過ると右下に大日小屋がある。附近はみごとな森林に囲まれ中々感じのよい小屋だ、水筒に水を入れ、しばらく休んでいく。半に韮崎高校の生徒十数名が昨日とまり、今日金峰甲武信方面に出発したと云う紙が貼ってある。小屋から少し行くと道が二つに分れている。どちらも大日岩に行くので右の道を行く。この附近 両側は大きな石塊花の林であるが時期が遅いのか花は一つもない。小屋から三〇分ほどで、驚嘆を與正面に見る大日岩頂下の平地に出る。こゝにリックをおいてカメ

ラだけ持って少し左にまいてから木の根等につかまって軽快に攀ぢ岩頭の少し下の小平地に出る。こゝからの眺めは雄大である。金峰周上は之う間近に見え石丈石が左右に小く立っている。前陽の左には八ケ岳が連り更に左に御岳、木曾駒、甲斐駒、白峯と連っている。一時間ばかり眺望を楽しんでから出発する。あまり長く休みすぎたせいか、急に腹の調子が変になり、汗がだらく出る。途中で食事をしたが、全然食欲がない。力の入らぬ足を引ずって百花、石楠花の咲く砂礫や、雅子の吹上峰を通り、樅松帯に出てから五丈石を辿ぎ下り、丁度十二時に頂上についた。頂上には四五人の青年がいて、甲府方面に降っていった。頂上についた頃は、霧が出て甲府方面は何も見えないが、行手の国師、甲武信の方はよく見える。中でも甲武信南面のガケガ赤茶けて大きく見えた。一時間ほど休んで出発する。ガンコウラン、岳桃等の間の道をたどりく降って行くと、鉄山はいつの間にかまいて、朝日との鞍部に出る。体はますく悪化して疲れる事、おびたゞしい。二人にはげまされて、朝日岳につき、雷鳴も聞えて来るので休む間もなく出発、三十分で秩父最高の峰、朝日峰につく。白檜の樹林下に羊歯の生えている陰気な峰だ。こゝからは二つばかり小さな頭を越えると、あとは緩慢な上下の後、丁度三時にだれもいない大弛の小屋に着いた。ふゝくり休を床に止めていると、当間のピッケルを持った一人の青年が来た。今朝雲海を立ったこの事だった。夕方からは雨が降ったが、天気を心配する元気もなかった。夜はものすごく寒く、又つのみしの攻撃に会いほとんど寝られなかった。

（以上、神島）

第三日　晴霧風強し

小屋（六、三〇）―国師岳第一峯（六、五五―この間北奥千丈往復二〇分―七、一〇）―国師岳（八、一五）―富士見（九、四五―九、五五）―甲武信岳（一二、〇五―一二、二五）―甲武信小屋（一二、三〇―一、三五水場往復十五分）丁字路（一、四〇―一、五〇）―西破風（三、四五）―東破風（三、〇〇）―雁坂嶺（三、四五―三、五五）―雁坂峠（四、〇五―四、四〇）―水晶山（五、〇〇―五、一〇）―雁峠（六、〇五）―笹取小屋（六、一〇）

今回の雨も何時しか止み笹の葉づれに星が明滅している。もう三時半だ、友のかすかな寝言が伝って来るのを一人火を焚いていると云い知れぬ寂寞感に捕められて行く。奈生林の夜明け……

大時出発、梅の処女林の中を渡れからアルバイトが続く、神島さんの調子が思わしくない。鬱の蔭く石楠花の海をわけて雁坂峠へ出ると待望の国師岳第一峯へは真近かだ。風が少し強くなったが、秩父最高峰北奥千丈岳の朝焼が光っている。頂から下ると右に北奥千丈岳への踏跡をみ出す。リュックを下して朝露にぬれた道路をわけて北奥千丈岳の岩峰にたどりついた。此所はまだ石楠花が満開だ。展望はよく雲海の上に北から浅間、妙高、白馬、八ケ岳、木曾駒、甲斐駒、仙丈、北岳、富士の秀峰を朝日に輝き近くは主脈の甲武信、木賊、三宝山等の高さで遥び眼下に黒金山、乾徳山を見下し雲海の彼方になじみ深い御前山、大岳山さえ浮いている。秩父中最大の展望台であろう、カメラが三百六十度をねらう。

分岐附近は迷路が多いが水場があるから甲武信岳の水を用意した方が良い、国師岳へは近い。三角点から左すれば若屋林道を経て持山へ行く道、神島さんと別れて右の主脈を下る。長い下りが続く。何処迄も陰鬱なこのつがの原生林だ。静寂そのもの、少しも荒された形せずの余り美の自然の姿だ。この神秘感こそ秩父特有のものだろう。はるか下方に信州沢のせせらぎが聞える。いくつかの起伏を上下すると明るい富士見に出る。名の如く富士が美しい。木賊から派出された鶏冠山の岩峰に異様をそゝられつゝ再び処女林にもぐり込む。倒木が多い。頭上に白い鳥の群が赤鬼のように鳴きたてていた。がし場に出ると甲武信の頂はもう眼前に迫っている。最後のアルバイトを突破すると甲武信の岩峰に立っていた。あっけない感がした。今迄の甲武尾根を右に径をとって、甲武国境を行くのだ。時間が充分にあるので雁坂小屋迄と決め、睡眠不足の友を励ましつゝ水の補給する必要があった。午后一時半風が強くなって来たので木賊の頂を敬遠して腹をまく事にする。甲武信小屋の番人もその存在を知らない踏跡が木賊の北側をまいている。用心しないと跡を見失いや

笹取小屋（六、一〇）

すい。我々がこれを選んだのは時間的経路を見失いやすい、我々がこれを選んだのは時間的至当からだ。微度路へは十分余りだ。風が強くなって来たので鞍部の破風小屋迄駆下りる。寄戸の鞍部まのこ風通しよい、霧が出始めて来た。中央気象台の云う不連続線だと早合点して戦々恐々中最も急峻な破風にあわててとりくむ、今迄の中で最もつらい。我々の行くところ大部分が岩ばかりだ。しかしピッチを許めず登る、時間的に早く西破風山の岩上に立った。周りが霧にかこまれるとナイフリッヂの出出横ないの様に感じられる、やゝ下り始め尾根の北側を削木になやまされながらいくと東破風の上には漢があり径は二分する、右へ径をとって下ると拓れた大木の林となって風に木々がまさつされて不気味な音を発している。ゆるい登りになると雁坂峠の草原が眼下に広がり遠く雲松尾山の岩に大洞山が霧に見えかくれしている　此所雁坂峠は原生林から始た瞬間的開ける様を持った草原で、黄、白の花々が咲き牧歌的情趣をそなへて爵知の如く我々を迎へる、石すれば広瀬への道で草原の中を雨吹外の深いきれ込み中に有えなへは暗い森へ道は遥はるか彼方に向っている。草の自然美の中を探ねて来た我々には、人間的に富んだこの時に明るい暖さを見出した哀びに充ちていた。雁坂小屋に着るのも半端まので笠取小屋迄ノバす事にする。熊笹がひざも没する程育っている中を水晶山へ急ぐ、側木が多く歩くのさへ困難である、速度がにぶり始める、頂上迄は幾多の難所をへた。頂と云っても三角点はない、この下りに必側木は多い、この辺りが主脈中最も荒れている　下り切ると古礼山の腹を比へまく道だ、径が尾根上に出ると、もう草取まじりにとはず、腹のへったのに気がついたからだ。眼下に広い草原を見出せば雁峠への急はジクザクの道になる、仰げば植林された笠取山が美しく植林された落葉松の夜は霧の中を南の尾根へうすれて行く、左右から径を合した所が雁峠だ。雁坂峠より喝して教偕の美しさだ。石すれば広瀬、左すれば釣橋小屋である風が止み雨が降り始めた、途中の径を小丘一つ越えると広い道に出る、南への径からや、斜の下への広い径をたどると異大の声が霧の降りた落葉松にかこまれた新しい笠取小屋の火へ導いてくれる。　（田中記）

第四日　晴后雷雨

小屋（六、〇五）―将監峠（八、〇五―八、二五）―大ダルミ（九、五）―ハゲ岩（九、五〇―一〇、〇〇）―狼平（一一、一〇）―休憩（一二、二〇―一二、四五）―甲州雲取小屋着（一二、〇五）―雲取山（一二、四〇）―大洞（一、二〇）―小袖（二、三〇）―鶴沢（三、二〇）

人の良い笠取小屋の親爺さんに別れを告げて深い雲海の中を将監峠へ急ぐ。予定が雲取迄十二時に行くつもりだからだ。雲松尾山の腹をぐるくまわる、水は多摩川の水源だけあって豊富に出ている。二時間余りにして将監峠の明るい茅戸に出る、この峠の気分を味はう暇もなく飛竜山へと竜喰山の南面をまく、この辺り笹だにになやまされる、やがて掛の掛越しに前飛竜が現れて来ると大ダルミの茅戸迄知らぬ間に着きハゲ岩迄の暗い径も一気に登ってくる。此処で今朝雲取を出てノビて来った連中に合う。今日から天気がくずれそうなので早々にして狼平に走り下る。甲信国境と異ひ明るいだけに暑い。甲州雲取小屋跡の手前で昼食をする。二面相の雲取山が眼前に立っている、小屋路から後山谷へ径を分つ頃から大洞谷側の雷雲もものすごく又丹波側の雲も身近に迫り雲取への急登をあせる、一二時四〇分三角点着、雷鳴しだいに近り休む間もなく防火線を下る、雨の下に危険極りまり、大樹迄四〇分、こゝに至り雷雨は本降的となった。水筒に水なく、寿に来た沢へ行っても伏流となり、乾ききった体に雨はマッケを通す。小袖の部落で水をもう頂に瞬間も出たが鶴沢につくと又烈しい雷雨に見舞れた。悪天を感じつゝバスで氷川に向う。　（田中記）

―〔後記〕―

この山行計画には完全な注意が払われていたにもかゝわらず、反省する余地があると思う。中央気象台に問合せた所一七日より荒れるとの反事に少し心配だったが、この予報も適中せず夜間のみ雨が降ったのは雨男の一人がいたにもかゝわらず幸運であった。しかし参加者の気象知識が一般に低いとも云へよう。最初の計画は五泊六日であったが、第三

を知らない踏跡が木賊の北側をまいている。用心しないと跡を見失いや

目目からピッチをあげ三泊四日の記録となった。だいたいこの原因は二つあり、一つは費用を節約してもう一度山行を多くしたい事、一つは天気予報の不連続線の恐怖と毎日夫って千百から来る雷雨との恐怖症によつたもの、登山は陸上競技と異つて記録の成績ではなく今回の山行にもワンダラーとしての色彩が充分でなかつたとも云へる。然にしを失ってかうは天候の恐れでものすごいピッチをあげた。笠取山の親父さんによると今年初の記録だとの事、確証ではスキーが出来るとか冬にでも訪れて秤のお供でも縦走路は裏附まれている。

食欲がない時の用意に酸性の副食物が少かった点と共に精生知識の不足から御嶽さんが途中下山の止むなきに至ってるった。又食欲盛んなものは尽前に平げたのも一考を要する。尚縦走には水が必しい事は云う迄もなく水筒の水をのみ切って水場毎に補っていたが二日は次に水場がなかった場合や、始終水をのんでいると徒らに疲労を増すと予定地迄の縦走に苦しくなる。殊に雲取ー小袖間はこの感がなかったではなく、水場では水場の水を充分にのみ、なるべく水筒の水を保持するようにしなければならない。奥秩父を一般的に云へば低山と同様エチケットが乱れている。大地小屋の如きいたる所に「XX山岳会」「○○記念」等を彫りサイドを破り立派な指道標に彫り込んだりしてあるのは確かな自然美の反面残念であった。

富士山

記録　三C　笹野幸夫
報告　二E　中野英司

「コースタイム」

八月四日（金）　曇後雨

新宿駅（九、三五）ー大月駅（一二、〇五）ー富士吉田駅（一二、五八ー一六、三〇）ー一合目（一六、四二）ー二合目（一七、〇五）ー三合目（一七、二〇ー一七、四〇）ー四合目（一七、五〇）ー五合目（一八、〇五）ー六合目（一九、〇五）雨のため停滞ー二三時就床

八月五日（土）　朝曇雨、日中曇

起床（六、〇〇）ー六合目発（九、四〇）ー七合目（一〇、四五）ー八合目（一二、〇〇ー一二、三〇）ー九合目（一四、三〇）ー北口山頂（一五、〇〇ー一五、五〇）ー剣ヶ峯三角点（一六、二〇）ー北口山頂（一六、五〇）引返し六合目（一九、三〇）泊ー二三時就床

八月六日（日）　曇後雨時々晴

起床（七、〇〇）ー六合目発（一〇、〇〇）ー再返（一二、三〇ー一二、五五）ー中の茶屋（一二、三五）ー浅間神社（一三、四〇）ー富士吉田駅（一四、〇〇ー一四、一五）バス御殿場駅（一五、五〇ー一六、四八）ー国府津駅（一七、四七ー一八、〇〇）ー東京駅（一九、四五）

「費用」

汽車賃（学割使用）	一六二円	バス代	二五〇円
宿泊料	四三〇円	金剛杖	四五円
焼印料	六五円	茶代	三〇円
草鞋代	八〇円	合計	一〇六二円

「携帯品」

ヤッケ、ジャンパー、セーター、冬用シャツ、ズボン下、足袋（二足）、防寒、水（一升）、パン少量、水筒、足袋（三足）、手拭、飯盒、歯、砂糖、懐中電灯、地図（山中湖、富士山、御殿場）カメラ、時計、医薬品

「参加人員」

一H野口弘生、一D加藤鈴夫、2D羽山建三、2E笹野英、中野英司、鈴木輝夫、名倉積、二G金子宗武、星明良、2H桐谷雄二　3C笹野幸夫　3H和才宏二　随行教師板沢武男先生　以上十三名

「報告」

茂川あたりで降り出した雨は案じられたものの幸か不幸か吉田で止んだ。この事が今后の行動を決定ずけたのであるが……

再返迄のバスを大分待たされ予定より二時間おくれる。再返から皆大尺棒を持ち勇ましく歩きはじめる。早速承嶽の一曲と、足弱な一曲と二分する。乾徳山でくたばった鈴木は今日は三年の和才さんと共にトソプ

となりぐいく歩く。一年二人もおくれじと続く。板沢先生盛んに皆を笑わせてはいるものの荷物をたくさん持って来すぎたとこぼしている。

一合目に焼印をおしてもらい登るが、まだ大した登りでないうち三分で金子がバテる。彼をこの登山へかんゆうした僕は大いに責任を感じて！…？…… 一番重い米、運搬をしよってやる、がまだ熱目らしく、先生、笹野さんが残りをしよって彼室時となったが、足が動かないうしい。このあたり霧雨が降って来る、この金子がおくれ勝となるため全体が二分し更に三分する

一つ後の我々（実は先生、笹野さん以下水蒸なのだが）が六合目迄きてここで食事となった。すると今迄のしとしと雨が一変して豪雨となった。ここまではかなりの森の中を歩んでいたが、ここより上は木一本なく熊毛帯で風が加わるから無理ではないかというので食事のために立寄った小屋で一泊となった。我々が落着くと先へ行った者が気にかゝる。先生笹野さん僕の三人が上の方へ連絡にと豪雨列風の中懐中電灯を頼りに出たものゝ熊毛帯に入るやいなや僕は帽子を風にもぎとられる、とたんにおちけづいた僕が引返す事を力説して引返した。この夜羽山が食あたりになったらしく苦しむ。

朝、雨の降りしきる中、上から先に行った四人が運ぶくに下って来た。ここで羽山を残して登れる丈登ってみようという事になる。昨夜我々が心配した通り三つに分れていた。

雨中、尽食だけ持って出発、七合で残り三名を吸収し頂上へ、雨はレインコートを通してパンツ迄ぬれて寒い、八合で横氏十一時 ここで尽食としたが、皆食欲はなく、僕は剣合目へ入る。なべ残しの飯盒とりソクをおいて出発、雨は霧んど止み時々日光がさす。一応雲の上へ出ている。下の雲海の中に時々山中湖が見える。かまたのブルーの雲の色の美しさが目にしみる。六合から同じ傾斜が続いている、この道はさえない赤色の落岩のガレ道、考へていた程苦しい傾斜でないが、これがすぐ目の上に見える頂上まで続いている。

八合目に郵便局があり、家に葉書を出す。寒くて立っていられない。

尺棒を持ち勇ましく歩きはじめる。早速承塩の一問と、足弱な一問と二分する。乾徳山でくたばった鈴木は今日は三年の初才さんと共にトソア

九合で「一万二千尺」という焼印をおしてもらって頂上迄あと五百米、「大根精淨」ととなへる行程も苦しそうである。

遂に東北吉田口頂上へ来た。寒くて後の連中を待てず、僕と星は最高実剣が峯を指していそぐ、前の大爆発をしのばせる火口は雪を持って深い、浅間神社奥宮をすぎ、ちょっとがんばれば測候所の横に日本の最高実三七七六、三米の二等三角点がある。これをしっかりふんだ時はいささか感激する。午后二時五分晴れていればすばらしい景色に感激するのだろうに、下界は全然見えない。感激と同時にちょっとがっかりする。だが、日本にはこれより高い山はないと、が、すぐ頭にピンと来る、ヒマラヤ山脈、エレベスト山?!……　お鉢まわりはせずすぐ引返す、又吉田口の所迄引返せば先生以下おくれた人達が登って来た所、ここで写真をとったりして後笹野さん達は最高実へ向う、先生以下四五名と共に僕と星も残っている。鈴木と一年の野口は今夜中に帰るど云い先に元気よく下って行く、残りは昨夜我々の眠た六合の小屋へ集結してもう一泊する事にきまっている。

下りにかゝる、皆早い、笹野さんほか胸のむかつくというのが大分いる。その人達は砂走りを、僕と先生は八合に残している尽飯に持ってきた飯、をしょはなくてはいけないので登ってきた道を下る。

七合過ぎた頃から又雨が降り出したが不思議にも頂上は夕日に照されあのきたならしい若がまあヌ何と花々しく美しい事か、思わず目をこすった、我々は雨で水もしたたる美い男になっているのに、六合の小屋へ着いた時は悲暗くなっていた。羽山も元気回復して起きてきていた。

日程が一日繰して僕は真先に金がなくなった、主食、おかず共に乏しい、先生は食糧に困を使っていう、いかに食いのばしをするか、結局僕の考へ出した案、朝おそく起きて朝尽両食兼用をつめ込んで下山というのが採用となる。

朝は寒れいに晴れている、が朝暁なので後が心配　写真をとったり皆元気がよい、昨夜はのみの来襲もなく良く休に為だろう、御中道で御殿場えとの考へもあったが、バスで吉田から御殿場へ行く事にする

笛吹川釜沢遡行―甲武信岳―国師岳―金峯山

笹田英次

〔タイム〕

《第一日》二十四日(雨)新宿(一九、五〇)―塩山(二三、四〇)駅待合室にて休憩

《第二日》二十五日(晴)塩山(一、〇〇)―窪平(二、三五―二、五五)―徳和分岐(三、三〇)―広瀬(七、〇〇―七、一五)―バラ平(八、二〇)

日原近丸氏宅に一泊

《第三日》二十六日(晴)バラ平(七、四五)―キヨヘイ窪(九、二五―九、三〇)―エ事小屋跡(一〇、〇〇)―東の滑(一一、〇〇)―落合 鶏冠山探鉱事務所(一二、三〇―一三、〇〇)―両門の滝(一四、三〇―一五、〇〇)―釜沢原荒(一八、一五)

《第四日》二十七日(曇後雨)原荒(八、三〇)―甲武信小屋水場(八、四五―九、〇〇)―甲武信小屋(九、二五)―甲武信岳(九、四五―一〇、〇五)―ミゾレ(一〇、四〇)―富士見(一一、二五―一二、〇〇)―国師岳(一、四五)―大地小屋(一、二〇)

《第五日》二十八日(雨)豪雨のため大地小屋滞在

《第六日》二十九日(雨)小屋(七、五〇)―朝日岳(八、三五―八、四〇)―鉄山(九、〇五)―金峯山三角点(九、三五)―大日小屋(一一、二〇―一二、三〇)―瑞富陣屋所(一六、三〇―一七、三〇)―バス―韮崎(一八、四〇―一九、二〇)―新宿(二三、三〇)解散

参加者

2A笹田英次(主將)　2A平沢勇　2D長崎正昭

2D村田博之　2E平沢一郎

報告

「あゝ寒い」と言つぶやくと私は足元にうずまっていたラトンを引っぱり上げた。ほんの少しのぬっかれない間にも明日の事が走馬灯のように回転している。

一昨日の夕刻もうすでにネオンのかがやいていた新宿で汽車にのり涼しい風にゆられ、学生特有の無駄口をきいて退屈することなくゆみ又やみの夜の中笑顔を塩山へとつっぱしった。夜中の一時といえばいつもは白河で夜船にのる時なのだが)に塩山駅をはなれて暗い夜道の中を重いリュックをかつぎ次第に重くなる足をひきずりとしるとくつきそうになるまぶたをひらげながら広瀬に向って歩いた。そして山間の美しい夜明け後も谷川の音や鳥の声をきゝながら軌道の上を広瀬へと歩いた。我々一行の速さはカタツムリの感ようしくの遅さだった。日が昇ってからの歩行は非常に苦行だったというのはリックは重くなる、日は頭にカンカンとてりつける、ぬかさはぬるくとまして来る、疲も重くなる、腰はすいて来る　といった状態だったからである。だがとにもかくにも広瀬をすぎてバラ平迄来た　そして日原氏宅にリックをおろした。そして明日をひかえていや今日をひかえて今フトンの中に手足をのばしている。フロに入った後の心地よさがもうすでに体のいたみをけしている。

朝だなと感じる小鳥の声が山々に小さくこだまし、谷川のせせらぎが中天にひびいている。ソット時計を見て皆を起し外へ出る。地下足袋がつゆでしっとりとぬれている。皆ですぐ食事の仕度にかかる。空がやっと白んで来て山々の水々の緑がかすかに見えている。まだ静かだ。風の音が樹々木々の梢をゆるがす。朝食の用意が出来た、冷しい位らもおいしかった朝食。小屋の主からもらった牛乳に西づつみを打つ、やがて出発の時間となった、小屋の主に色々の説明を聞いた後、皆で記念撮影して出発した。〻さようなら〻〻ありがとうございました〻の声が遠く山々にこだまする、太陽は金色にかがやき我々のかげを軌道に浮々とうつし出している、露が葉の上できらきらとひかっている。さわやかな風が河原から吹き上げて木々をなぜる、露でぬれて光っている軌道を元気に進む、裂け目が左をすぎる。草原風な山の裾野がいうがっている所でトサカ山の写真をとる、あの急峻なトサカ山へのぼって見たいとは我々だけの欲望だろうか？。やがて木炭の集積小屋をすぎた、そろそろ肩に荷がくいこみはじめる。首がいたいので上をみると空には白い雲がポッカリと浮いていた。今までの草原がすぎて石側の山がぐっとせまって来た。山の緑がかがやいている、今までの川がここではもう谷だ、道がずっと下る、未だ軌道がつづいている。三四十分進んでから左手に大きな小屋を見た、又進む硅石の小山と素道があり小屋があった。小屋は硅石の工事小屋か何かだろう、大きく石折してから軌道のおちた所に来る、タク沢の出入口だ。谷底まで二度おりてから対岸をのぼる、道が少々雑草だ。少し休んで道を探す。鳥の声水の音が聞えて来る、こっは山かげなので非常に深しい。〻ヤホーク〻とだれかがどなる〻カーン〻とひびくような音がしてきて来る。道はわかった。左に行くのだ、左に進んで少し行くと左手に小屋があった。道を聞こうと中に入るが人はいなくてノミがいた。之をすぎて少しゆくと軌道が絞につっこんでいる。軌道の終点だ少しもどって折する、五米位の差下に道がつづいている、それを石に又進む、素道の橋下をすぎる、この辺は軌道の廃道であろう、未だ開拓がころがっている、河原が左遠下に見える、河原からの空気がひびいている。フロに入った後の心地よさ〻〻そうすこに休のいたみをけしている。

する。石がごつごつと突出しているその間を水が自由に流れて行く、きれいだ、ぞっとする程きれいだ。少し行くと水音がすまじい所に来た。面沢と東沢の合流点だ。それが木と木の間にすかして見える、東沢に近つて進むと道は谷に下った水の中を対岸に渡る。ものすごくつめたい水だ、やっぱりすると流されそうになる、左岸に平地があって素道の終点となっている。こっでのずうしくも人にあう学生だ。少し進むと又石岸へ移って行く、水の中に入る、こっの所は木のかげで非常に暗い、左岸に行くと小道にかゝる、すずしくて気持がよい。もう山も深く水音、風音足音以外は何にも聞えない、静かだ。白光のあたった明るい所が山のあちこちに見える。山道を少しつぼると二俣小屋があった。これをすぎてトサカ沢にそって行く、行手に山が見える、やがて丸木橋があったいまにもこわれそうだ。わりに大きい支流トサカ沢をすぎる、本沢にそって進むと滝か何かを大きくまいてでもいるのか水音が大きく聞えてくる、奥留の滝だそうだ。所々に左遠下に谷の見える所がある道が細くなってきれている所もある。道のわかれている所がある結ぶのがない。ただ谷をまいている道がつづいている。河へ下る道があれば木々の見へ行ける結ぶのだが、やがて木々の間のあたを大きくまく、下方に木木の間から谷が見える。深淵だ、ホラの間をすぎると思われる頃から向い側の山トサカがずっと近づいて来た、我々は谷から結縁されてまおも谷をまいたがいくつかのほりおりをしている内に谷に出た、谷はやはりいい、複雑だ、調和だ、美だ、これが谷のよさだ、又谷を進む、ケルンがあちこちにある。いいものだ。我々もつくる、滑が所々にある、滝もある、滝も。ある。やがて小屋跡に出た。又進むと左岸に渡る川がだいぶ大きくまがっている。どこかに鉄橋ながしの跡があった。少し行くと左岸に渡り少しまく、もう相当に暮れ　地下足袋が重い、谷に出て河原を歩く砂に東るとすべる、石かり石に飛んで渡る、その相子にリュックがくんとゆれてたおれそうになる。西のナメをすぎる。まるほどナメだ、ものすごい。一枚岩だ、東のメナをすぎる西のより小さい。木々の間から水が流れてくる。左岸は未だ急角の一枚岩、右岸は岩は低くすぐと木がはえて

いる。このころになってまた水音がはげしくなる金山沢出合だ石を行くと小屋が見えて来る。一段と高い所にあり、表札には〝鶏冠山鉱山探鉱事務所〟と記してある。中に入ると早速だれかがノミにたかられた。この時は十二時三十分だった。少し休む小屋から見ると下手に金山沢上手に信州沢眼前に釜沢の三つの沢が見え、それらが合流している。そして今まで通って来た栗沢を作っている。水は豊富にうずまりている。音を立てて流れて行く釜沢は流れが一番静かだ。東南に天の斧できり出したようなトサカの岸壁がみえた。〝さあ行こう〟と軍意気あらく出発した。又右側をゆくすぐに刃物でえぐりとった様な釜にある、滝の下にあるのだ、道は左側にうっり滝のそばをよじのぼって一枚岩を急いで渡る。上から見ると釜に水の落ちこんでいる様がすさまじい、この辺りは一枚岩釜、滝の三部合唱の地だ、釜が二重になっている所もある、一枚岩を右岸から左岸に渡る水の流れで流されそうになる、うっかりスリップすると命にかゝわる。やっと渡って滝にかゝる、水が上から勢いよく流れて岩や釜にそのまゝぶつかる、しぶきがぱっと顔にかゝる、滝の上へ出ると水は静かに一枚岩の上をすべっている又すゝむ、滝だ右側をまく、滝だ左によりすぎて左の一角に水がおちている そしてその水が釜の中で大きくひろがっている 滝の水の落ちる所の水底はどの位深ろう、小滝がある、かまわず登ぼる。大滝があるまいてのぼる、アンザイレンしてもいいような所がある、大きい滝の中にはこゆいようなものもある、滝をみてふるえる人はすべからくよすべし 滝をまくのでも一枚岩の岩肌をぢりくとのぼって行く所がある、一つまちがったらば……景色はすばらしい、行手に甲武信の頂上が見える樹でもかっているのかずっと向うに見える、〝おいくあすこまで行くのか〟とだれかがとんきょうな声をあげる。行手は岩と水、一枚岩釜 滝のアンコールがつゞく、水がほとばしる。身をきるようにつめたい水が、両岸は岩だ、だが十本一五米位から上は木がしげっている。中には倒木がある、水々がだんくと低い所まで生えて来るようになっても未だアンコールはつゞいている 所々に倒木が行手のじゃまをする、やがて大きい倒木が右から左にゆたっている所に来る、この木の向うに大きい釜がある。その上に大きい一枚岩があってそこに二筋の滝が流れおちている。西門の滝だ。一つは東沢本谷から一つは西取沢からである、本谷の滝は上まで一枚岩で見とおせる。西取沢の滝は木々の間から水が流れてくる。がなんといっても二つの大滝が一つの釜に落ちこむのだから壮観だ、両岩とも滝の高さ約二十米巾はせまい、釜のさしわたし約十五米深さ三米ー五米水は澄んで下まで見とおせる、これらの数字は内ゆに見つもってある。考えてみなさい。なんというばかでかいしろものかを、両岩の〝壁は少まいが三つが集ると多くなる。滝も水がすべっているように見えてナメといった感じがする、よくこれを見てから〝さようなら〟をする。右側の滝の右側をまいて滝のすぐそばを通り上に出る。甲武信の頂上がおいでくをしている。行手は未だ岩と水だ、だがこゝからは滝は岩ばんどなくナメが多い。少し行くと水量がぐっとへって伏流が表はれてくる、これを渡むとゼルはトクサ、左は甲武信のガレへ出てしまう。道はケルンとナタメどキャラメルのカラをたはって水の一番多い流れを常に進む。もう少しと思うが仲々進めない、足が重くて仕方がない、斜面は急だナメが多いので歩きにくい。この辺は沢筋以外は林で地面はコケにおおわれている。もう時間がへって来た。右側花が見え始める 又元気になった。メタ目とケルンをさがしながら進む。ナタ目が仲々まい、あると思って行くと次がない、こゝいらで大部てまをとった。たしか沢山倒木のあった所の少し上であったと思う。やっと探しあてた。道がじくざくでケルンも所々にあった。途中時々休みながら進んだ。あたりは大部暗くなった。もう十タ目が見えない〝道のまよったのかな〟と思う。口には出せない〝尾根はすぐそこに見える、いざとまればそれを伝はって上に行けば縦走路に出るだろう。仕方がない木々の間で野宿する。もう皆腹がへって進めなくなったのだ。水筒がもう少し上にあるとわかっていればそこまでいったのだがやがてナメの長い所の左手の林の中にタ食をすませて毛布にくるまってねた。下が岩でごつくだった。夜中に寒くてよく目をさました。近がテントから出ていたこともある。林がテントから出てしま

った人もある。さむさは身にしみる。水の音が雨のような錯覚を起す…。

…　朝だ、長く感じた夜がすぎて待ちに待った朝が来たのだ。ソそいで朝食をすました。キリがこく流れている中を出発した。ナタメはあった。さむい、水はあいかわらず滴々と流れている。やがて我々は秋長の泊場の中に入った。水場についたのだ。道はまちがっていなかった。やっと目的地についたのだ。いゞ今朝の目的地についたのだ。米粒があちこちにおちていた。玉ネギも落ちていた。指導標も立っていた。我々もここで米をといだ。水筒に水を入れてやがて出発した。小屋について主に時間をきいた。九時二十分とのこと、やがて我々は霧の中に厳然と立つ甲武信岳の頂きについた。我々をまねいていたあの山だ。西南花が頂き一杯に生えていた。キリが一陣の風とともに白く流れる。とても美しいキリが今にも雨となりそうである。あたり一面乳色のキリの海、見えるものは頂き以外には何もない。我々の行手すらもキリにかくれている。日程の半分もすぎていまいわにもう苦難にぶっかった。やがてキリの向うにかくれている。幾多の苦難に向って我々は甲武信の頂きをはなれていった。（追記　この日ついに雨にいられてともかく大弛小屋についた。次の日はふりこめられてその次の日にやっと韮崎へと強行軍して行ったのである。

「後　記」

この信次川遡行は大変いいコースである。日程と持って行くものに気をつければ楽なコースである。所ち日程に余りをもたせ持物は少くするのである。そして地下足袋かわらじで行くのである。道は道標はなく、ケルンとナタメが目当であるから気をつけて行くそして自分達のこしらえて行くザイルがあると完全遡行を臨山からやり得る。これはやってみる価値がある。道で気をつけるのは橋がない事と、分岐を右に行くか左に行くかである。大きい分岐は地図でわかるが終りの方の伏流の分岐は水の一番多い所をまかずにずっと水の中を歩いて行くことが一番早く且つ安全である。ナタ目は少し遠いし、ケルンはすぐこわれたりしてもはわからないしいたずらに作ったのも中にはあるようだ。水の中を歩くことはいけない事だが（一）だけは仕方がないと思う。皆さん一度はここに行ってごらんなさい。

「装　備」

テント（ポールつき）、グランドシート、毛布二枚、コッフェル二、ケンネン一五、山刀二、細引二、雨具、冬服、各一つづつ、ハンゴー二、医薬品　ノコギリ二　その他食料　カンズメ（魚と果物）　干物、コーヒー、ドロップ等　主にものもちのよい食料　主食は米のみ

「費　用」

汽車賃往復（学割使用）百八十円、バス賃六十五円、食料品雑入代五〇〇円

北アルプス燕槍縦走報告

二A　山口雄弘

参加者　田中　実、　山口雄弘

第一日（七月二十六日）　新宿発（二二、〇〇）

第二日　松本（五二〇）―有明（六、二五）―一之瀬（一〇、三五）―信濃坂（一二、一五）―中房温泉（一二、四五）尽食―第一ベンチ（二、〇〇）―第二ベンチ（三、二五）―第三ベンチ（三、〇〇）―合戦小屋（四、四〇）―燕山荘（五、〇〇）泊

第三日　燕山荘発（八、一五）―蛙岩―大天井岳（一〇、三〇）―西岳小屋（一三、四五）―槍沢小屋（一四、四五）―殺生小屋（四、一五）泊

第四日　殺生小屋発（八、三〇）―槍ケ岳頂上（九、一五）―殺生小屋（一〇、二〇）―槍沢小屋（一二、五―一三、三〇）尽食―一俣小屋（一五、〇―一六、一〇）―横尾山荘（一六、二〇）―徳沢（四、五〇）―明神池（五、四五―六、〇五）―上高地（六、三五）泊

信濃区でバスを降りて茶屋の裏の小路から十五分ばかり降って河原に出、流れにそって登る。ゆるい登りだが日が照りつけギャンプ場をすぎるころからテラ〳〵と雪渓のある尾根が見えかくれるのが燕岳のそれら

しい姿は見えない。肩の荷が重くなりがっる頃に中房の茶屋に着く。バスが一之瀬から信濃岳まで延長されたので予定より大分早く着いた。軽く昼飯をすませて茶屋の横をまわって登りにかっる。水が割合に多く、休まず一気に第一ベンチにつく。ここから先は合戦小屋まで水がないので水筒をみたす。さすがは北アルプスの三登りに数へられるだけあって、相当に急で猛烈に喉がかわき息が切れる。背中の荷をのろいながら、第二ベンチ、第三ベンチに着く。木が大きくなり暑さも全然感じまいな、汗が流れていて深のうてなどはひえきっていた。合戦小屋が近くなるとそろそろサルオガセが木にからみつき、その間から蒸かす大天井へのびている。明日の縦走尾根が雲の中から見えかくれする。

雪渓が一段と美しさを増し山頂のすばらしい展望の一端をのぞかせ心わはやるが足は一向に進まず、やたらに息が切れる。三時間ばかりかって合戦小屋につく、小屋までは展望が悪いが、それから先は水もゆくなり、まわりが急にひらけて来た。振りかえると真正面に槍岳をむきだした有明山が腰をすえその肩越しに松本平の一端と千曲川が遠くひろがっている。いよいよ蒸岳が近ずいたがすっかり雲がまいている。左へのびている尾根のかすか向うに雄大な姿を見せているのは常念岳だろうが近ずくにしたがって雲の切間に蒸山荘の赤い屋根が見えっヤッホーを呼けば。小屋は間近く見えたが前に着くまでが又時間がかかった。小屋の前まで行くと幸運にも雲が晴れ野口五郎、硫黄などの山々が逆光の中に浮び上った。右手に蒸岳が松の緑と砂の白さで色どられた美しい山肌を見せ思わずシャッターを切る。間もなく又霧がかかり下から吹き上げる風に身ぶるいし乍ら小屋に入った。

小屋の内は煙と人いきれでむんくしていた。部屋がなくあやうく食堂の隅に詰かされそうになったが田口さんのはからいで最上等の部屋へ入れてもらった。部屋には先客がいて候選が入ると丁度十一人になった。食事もしんのあるボロくの米だったがかりに押し込んだ。寝る頃になると雨が降り出し明日の天気をぼそくと心配していたが忽間のつかれで直ぐ眠ってしまった。

昨夜から降ってきた雨は止んだが霧は消えず百米先はかすんでいた。少し休すぎたため一番後から小屋を出た。カミソリの刃の様な尾根の道は狭いが石まじりの良い道でハイ松に足を取られる心配もなかった。昨夜はよくぬられたので足は軽い。歩きながらも晴れた日の美しさを思うと白風がうらめしかった。

これからは日頃の心がけを良くすることをちかいながらもくくと歩く。大天井から常念へまわる予定だったが風が強いので天狗ノ槍へ行くことにきめた。大天井までには蛭ノ沢右衛門、切通しなど、岩かあり、ときく一枚岩そびえ立つ間をぬって歩く時などは下界からかけはなれた別天地の仙人か何かのような気にもなったが、そんなのんびりした気分もあまり上下のない大天井までで常念への道と分れて左作新道へ入り大天井をまいて岩場にかっると前後して小屋を出た人達と度るのに順番をまつようになり思いがけなく時間を食ってしまった。この頃から霧は薄くなっていたが雨がまざって来てしまった。そろく三十分位に一回の休みが両麓に長く感じられ正午すぎに西岳小屋が見えたときは思はずカン声をあげる。

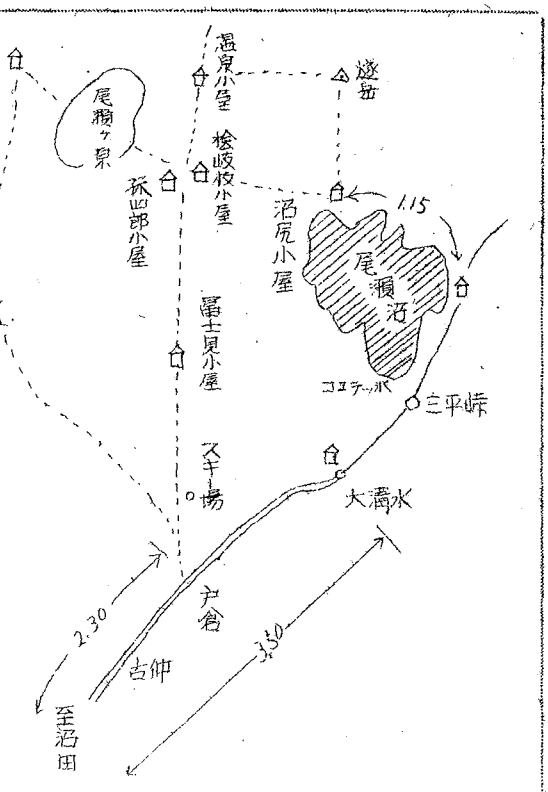
尾瀬沼

一〇 岩魚 安三

第一日

一昼夜寝ずというのに皆初の出足は良かった。大清水までのバスは、席を占れず立通し、木が道にかぶさり、ライトの範囲のみが明るい黒一色の墨絵よりだんくと行手の山際が黄味がかる、大清水に着く頃はもう大時早走した時の気持より事

大清水より三平峠迄荷物の重いせいか途中休むことしばし、清水に会った所で休憩、三平峠近くでは調子が出る。峠は一飛びで過ごす。下り



第一日　沼田発(七、三〇)―大清水(一二、三〇)―三平峠(三、一〇)―長蔵小屋(三、一〇)―沼尻キャンプ場(四、三五)

第二日　キャンプ(八、三〇)―燧道(八、三五―一〇、〇〇)―温泉小屋(一、一五―二、三〇)―孫四郎小屋(三、一五)―キャンプ指定地

第三日　キャンプ(四、三五)―富士見小屋(六、二五―七、〇五)―戸倉(一、三〇)

は遅い(遅いのが西高の校風だそうで)長く続いた雨のせいか、湿地帯の性質を早くも表わしたのか、どろくと溶けた上、三平より沼辺は歩く着いた。その辺では三、三人のグループを張っている。この点より長蔵小屋迄沼に伴った道、長蔵小屋は休憩所と、宿泊所が別棟になっていて割合さっぱりしている。こゝより沼尻平迄が一大難関であろうと事前に想像する、想像通り天下一品の悪道、一時間余り悪道は続く、沼尻平は荒観で　草一色で広々と平な感じが出た。関東平野というが現在の如き永の密集では、広い感じが薄いが故に一層見事に想えた。この沼尻平

では、キャンプ第一泊のので、その近くの湿地にキャンプ

第二日　燧ヶ嶽登山　中腹より雨、ゴツくした岩塊は山頂迄達し、その角六〇度位あるう道は真直に山頂に向っている。山頂の三角点をふむ時には風はその強さを増し、雨は一層その激を加え、一分一秒でも速く小屋に着きたい気持　やっとの思いで温泉小屋に着く、天候は上々だった。

泥にまみれた外被、上衣、シャツ、帽子を太陽の下にさゝうす、顔を洗う水は硫黄臭い一四度位だろう、多分二日を再び暖めて温泉というのだろう、孫四郎、検校岐迄は別段変なく平凡な道、途中昼食を食う、雇かに三〇分迄くで着く、この辺はキャンプ指定地なので果に張れる　荷物をテントに残し尾瀬ヶ泉を観察に行く、

第三日　寒い　ウイスキーを口に入れる、ルックの迄に雨降る、テントのあちこちに雨がある、仕方なく全員起床四三五、朝食の後出発、電池を頼って出発、雲を流した状態迄、国立公園の一部であるこの地にこの状態を分岐点に導標がないのは残念です、富士見峠はいっしか越し、富士見小屋に入り一休み、元気が出た。ビュン〳〵飛ばす、二時間飛ばした時、導標に合う、富士見峠一里半、一四一〇発の古仲発に乗る予定だったが、一二、二〇戸倉の間に合いそうなので急いだ。

パーティ　二下佐藤、井上、一と岩瀬

費用　汽車学割便用往復二百円、バス代(荷物代を含む)往復三百七十円

装備　テント、コッフェル、グランドシート　山刀

直ぐ眠ってしまった。

った所で休憩　三平峠迄くでは鎖子が出る。峠は一飛びで過ぎる。下り

ゴシップ

二E 田中将利

部報第一号の巻頭に「ケルンニ」と云う名文？がある、某が書いたにしてはどうも話がうますぎる。ところが或る部員が夜の宴へ行って何げなくおいてある某山岳会会報なるものをめくってみるとケルンについて書いてある、それがどうも一号のものに似ている、さては？さてはと云う眼合でもっぱら判判 ▼▼▼▼、、、、、

（これも又部報第一号「早川尾根小屋の想い出」の中に御島氏曰く「愉快な一夜を過したことが或はそうでなかった事さえ楽しい想い出となる」と書いている所を見ると彼は大弛小屋のハシゴの大改装も呑んで拒絶したに違いない▼▼▼▼、、、、、

信濃と信州と同じか違うか、今回の山行に信州川上だからと云って切符を売らない、家賃との口論はお決りだ。部員とはどうしてもつき合いにくいことか、彼等の云分にも一理あるが。▼▼▼▼、、、、

今井君遭難について

二E 田中将利

この事件は個人山行のものであるが、今回今井君のみでなく我々全部員の反省すべき点大いなるものがある、私は参加していなくて真相はよく分らないが、本人が全快する迄に一応聞き出した事を報告する。或いは誤った点があるかも知れないからその点訂せられよ。

八月二十日（雨）

パーティ八名 L今井、十時嗅鴨沢着、雨烈しくずぶぬれのまゝ堂所小屋着宿泊、サイド、天井大破の小屋であったため四時間しかねむれず、夜務晴れる。

八月二十一日（雨）

雨が晴れたので勇躍七時雲取山頂に立ったが、雨のため雲取小屋へ非難十時頃後に晴れ間を見て唐松林道を大ダワ林道に変更して奥多摩山岳会、豊多摩山岳部のパーティと共に下る事にする、全員十三名 トップサード今井ラストのオーダーで大ワダ林道より日原新道に入る。本谷悪場附近にてタ立となり五時半のバスに乗ろうとピッチをあげる。しかし日原迄わずかな景窓谷出合附近で今井バランスを失い、スリップして約十米転落負傷、顔面擦打、鼻内出血し重傷、この時豊多摩山岳部のB田中氏今井救助のためネンザする。急いで日原へ急報遭難者はタンカにて護送され遅よく青梅バス会社臨時のバスを借り氷川に運び手術を受ける。これが概要であるが我部には全然報告もなく九月一日一部のものが報告を受取った始末で遺族にも九月三日始めて芹田先生、笹野が行ったにすぎなかった。一方今井君の体も日々快復しているのは不幸の中でも喜ばしい事で

では何故このような事が起ったかと云う事を考えてみよう。

(一) 前夜パーティ

この事は日本の遭難の中でも重大な位置を示しているものだが、今井君の場合、他のパーティとの体力とパーティの統合が出来るか出来ないかを熟慮して合同したものらしい。一つ一つのパーティの性格が異る上に彼には疲れぬ我慢をバスに間に合う様にして急いだ事が彼を精神的に疲労させたのではなかろうか、と云うのは前の者との間をへ約十米）短縮しようとした時スリップしたとの事である

(二) 我慢

我慢の至愚は川苔谷のみしかなくて日原の新道へ長意義に下りしかも急いだ事はまだ林道の様子について自己の力と比較して調べていなかったことであろう。

(三) 前夜の不眠

前夜ぬれた上に上出来の堂所小屋で一泊したのが不眠の原因で、この

の不眠は一重に我慢ばかりでなくとも第二日目の行動にはフラフラする

ることが多いそうである、成層火山が爆発されると攻撃隊で刻まれるト

の不服は一重に桟道ばかりでなくとも第二日目の行動にはフラフラする事は必然的なものである。

(四) 鄭

真鍋氏も注視している様にぬれた桟道を運動靴で歩行したことにも大いに原因している。

富士雑感

三〇 笹野幸夫

高くつまらない費用がかゝる。これが富士山だ、この山のどこに魅力があるのだ、全く魅力なんて皆無だ、殊に天気の悪い時には、

台湾、朝鮮が日本のものでなくなった現在、日本で一番高いのは聳峰富士の剣ヶ峯らしい。民間飛行の開始も間近かの様だがこれも禁止されている現今いくら高い山に登って逆立して見たところで富士には及ぶまい。それにしても三七七六米が我国の最高では何と云っても情ない。せめて八千米級の山を一国の内に有していたいものだ。しかし日本に於ける最高峰と云うところにせいぜい魅力があるのだろう。

富士は世界有数の完全なコニーデ式火山だ。有史以来十数回の噴火を見るが、その平均周期は五十九年　五十七年、六十一年であり、宝永四年が最后とまっている。それ以来二百四十三年と云うもの噴火していないわけだが、二れは明るまでも休火山であって決して死火山ではないのだから、いつ爆発するかゆからないと云って突然噴火することは勿論ないが登山する人は一応覚えていて欲しいものだ。この成層火山は普通云はれる円錐形のものを指すのであって、火口から噴出された熔岩と砕屑物が交互に重ね合って明瞭な成層構造を示している。構成岩石は普通玄武岩、安山岩が多く傾斜は頂上近くで三十度に達するものがある。富士火外に有名なものとしてルソン島のマヨンがある。これも均斉のとれた円錐形火山だが、この種の火山では山腹にいくつかに寄生火山を有することが多いそうである。成層火山が浸蝕されると放射谷で刻まれるようになり熔岩や抛出物層の他に、これらの層の間に貫入した岩床や放射状の岩脈があらわれることがある。この例として富士山の大沢があるがまだそれ程発達はしていない。ときどころであまり話がむづかしくなって来たから二の話はこの辺でやめておこう。ところでこの富士山の姿は西から見るのが最も美しい。山頂の両端が上り長く裾を引いた形、確かに甲斐駒からの雲海の上に浮び上った富士は印象的だった。東京の方から見る富士、殊に西高の二階から見る富士も立派だ。しかし所謂表富士と云うのは駿河湾の方から東海道線の車窓から眺める富士は西側が高く東側が低くあの頂上、そして山腹の宝永山と大きなかしあまりよい恰好ではない。この富士山、いざ登って見ればつまらぬ山である。五合あたりまでは落葉松も生い繁り、少しは山に来たと云う気分も出るが、六合から上となると青や赤の岩石ばかりそれに逆礼の鈴があくまでも耳にへばりついていいかげんいやになる。はたして天気でも悪かったらそれこそ悲惨、見えるものはなにしなく続く岩肌と霧の世界である。五合目では天地界の境だと云っていた。してみると天と云うものはなにしないつまらぬ岩の様につめたいものか、気温は普通千米上る毎に五度下る。二れから計算してみても山頂の気温は夏でも〇度から五度位と云う事になる。おまけに気圧が低い。普通の人なら頭が痛くなって気持が悪くなるのはあたりまえだ。高さが高いだけに物価も極めて高い。高いものになると市価の二三倍、又座った丈でもお金をとられたのにはびっくりした。小屋のない所でゆっくり休むのがよろしい。今后行かれる人の参考迄に。

山頂からの眺めはさぞよいだろう、朝鮮の戦況如何と遠くを見やったが残念ながら一面の霧、十米先もみえなかった。剣ヶ峯には皆の防空壕を思わせる様な気象観測所があり風速計が急回転している。全く御苦労様な事だ。冬には零下何十度烈風荒むこの山頂に頑張って職務を遂行される所員の方には頭が下る。頂上からの眺めがこゝに書けないのは非常に残念、と云うのは終日悪天候で下界が見えなかったため。

こんなわけで諸君はつまらない山魅力のない山　夏の富士を分ってく

たろう。しかし一生のうちに一度は登っておく事をお奨めする。が二度と登る山でない事は周知の事実だ。火山は噴火によってその周辺に多大の被害を与へる。しかし人間が二の火山の恩恵を受けている面も決して少くない。そして地殻変動の資料とするのみならず、その地熱やガスは各方面に利用され又火山力使用の途も開かれようとしている。しかし今から火山が我国景勝地の主な中心となり豊富な温泉と共に数々の休養保健に役立っている二ことは忘れられない。実際国立公園をみてみても伊豆多摩等は例外としてその大部分が火山で構成されている。そこで富士もその一つ我国最大の景勝地と云う点で見直すことにしよう。

現役OB懇談会報告

中野英雨

九月九日午后二時より我部はじめてのOBと現役との懇談会を一日教室でおこなった。

芝野キャプテンの挨拶后、会員の簡単な自己紹介の后、なごやかに会は進行された。部の今后の方針、今迄の欠点の反省から山に対する考へ等真剣に討議された。さっやかな茶菓ではあったが、話は沢々とはずみ、登山の時の携物など、異論続出し、又登山時のパーテーの組方、リーダーの力量、負担等……

早稲田山岳部の安藤さんから、高校生の冬山問題、山への考え方など種々有益な話、又入部者一同で谷川岳でしばられ、完全にばてた話などうかがった。又今後の記念祭の時の部の行事などに種々お賛意をはいしゃくし、最後にこれから現役OBの密接な連りくを約し、種々の点で助言、指導をあおぐ事をお願ひし、四時散会した。

歩行

二B　森沢拓治

異秋父山行きにおいて特に歩行という点について考えてみた。どうも僕等の山径の歩き方は足の運びが非常に軽るすぎる様に感じを受けた。軽り携物のせいか足取が軽く成り勝ちなのであろうか、けれども山に慣れた人の足取りの軽やかさとは大分違った軽さだ。他のはいくら軽く早く歩いても長距離の場合は必ずグロッキーになる。山慣れした人の足取りは一歩一歩が地面にぴったりと着いている。体重が完全に足裏全体に掛っている。即ち足裏全体が地面についている間が永い、それにくらべて僕等の足は地面から早く離れ足裏全体より先に体重が掛る感がある。爪先でついて先を急ぐと早く疲労すると同時に脚の筋肉がつってきて長続きがしない。山に行くためには先づ歩行である。このため色々と歩行について自分の体験をまとめた。又歩行には自分の背中にあるリュックの重心も非常に歩行に関係があると思う。即ちリュックの重心を腰にして歩けば非常に重く感じその上歩行しにくい　だから重心をまるだけ腰よりも上、肩の後程度がよいと思う。米等の重い物を上に上げ水類は下にする。とよいと思う。そうすると非常に軽く感じると共に歩行も非常にはかどる。先づ第一に感じた事は疲労過ぎて休んでも恢復しない事。だから全行程を通じて平均して適当の時間歩いては休む又パーテイ等で山に行く場合自分が疲労して体が苦しいのをがまんして前進する事は後になってパーテイー全体に非常に迷惑を掛ける。だから体の調子が変であればすぐに申出るそして休んでもらう、けれども長休みは禁物である。なぜならば長く休んでいると非常につかれが出て来る　それを防ぐのにはリーダーがしっかりとプランを立てゝ一時間毎位三分乃至七、八分位の休みを置く様にすれば非常に能率が上る。歩行が出来ると思う。第二は歩きながら四囲の風物に良く目を留め観察する。これは実に大切な

事だと思った。山の型、地形、地物を記録する。第三はスピードを変える事なく歩き始めも終りも同じ歩幅で歩くとよいと思う。歩幅を変へることは疲労を招き易い。歩幅は成可く狭く、即ち大股に歩かないでゆっくりと一歩毎に体重をハッキリと足裏全体にのせて歩く、又重心は腰にかけて腰を中心として一歩一歩の移動にも腰が安定に前に移動するようにするとよいと思う。山は平地でないのだから必ず登らねばならない。登るには時間も動力もかかる。だから余計な動力を用ひずに自分の動力を出来る丈最小限にするには次の点に気をつけてはどうでせうか。先づ第一に特にゆっくりと歩く、決して急がない、仮令急にならねばならぬほどゆっくりと小股に歩く、二つ三つ間に合ない人は休憩で歩く様になり非常に疲れを感じる。第二として足裏全体を地面にしっかりとつけて踏みしめてゆっくり小股に歩く、又山を登れば必ず下らねばならない。こゝで僕等は知らずの内に足が速くなり歩幅も大きくなり勝ちである。足が早くなれば必ずよい結果は生れないと思う。例えば非常にコースを間違ひ易く目先をいためたり靴ずれを起すのも下りを急ぐためではないでせうか、又脚、膝を痛め易く且つ疲労も速かになるのではないでせうか、下りも上りと同様にゆっくりと歩くと良いと思います。以上僕の山行きでの体験した歩行についての話しを終ります。

我々の持っていたい知識

地学教室 I

天気予報 ①

三C 笹野幸夫

○予報術の沿革

一、原始時代

宗教的な予定……神墓に祈願したり、卜占の法を用いたりするもの

二、観察時代（十五世紀頃迄）

二は歩きながら四囲の風物に良く目を留め観察する、これは実に大切な

（例）㊀物質の先徴

イ 雨蛙が鳴くのは雨の兆

ロ 猫が顔を洗う真似をするのは雨の兆

ハ 魚の高く跳るのは雨、低いのは晴

ニ 池中の魚などが水面に出て呼吸をしていると雨が近い

ホ ハコベの花が閉ぢると雨

ヘ 煙の本の根本が重ると雨が近い

ト 岩石が汗をかくのは雨の兆

チ 鰹節を削るとき柔いのは雨の兆

リ 飯粒が茶碗に着くときは晴、綺麗にとれるときは雨

ヌ 煙突の煙が垂直ぐのぼる時は晴、横より下になびくときは雨の兆

㊁ 観天望気

イ 山が近く見えれば雨

ロ 夕焼は晴天の兆

ハ 月が暈を被ると雨

ニ 光環（コロナ）も雨の兆

ホ 朝の虹は雨、夕方の虹は晴

ヘ 星がチラくすると雨

ト 空の紺碧なのは晴の兆

チ 鐘声のはっきり聞えるのは雨の兆

リ 谷川や泉の音が判っきり聞えるのも雨の兆

ヌ 積雪を踏むとキュキュ音がすれば寒くなる

ル 煙が西へなびくと雨、東へなびくと晴

オ 羽雲は雨の兆（巻雲、巻層雲）

ワ 羊雲は雨の兆（高積雲）

カ 竜雲は雨の兆（乱層雲）

ヨ 帯雲は晴の兆（好晴積雲）

タ 蝶々雲は雨の兆（片雲）

レ、笠雲は雨の兆
ソ　空が高いと降らない。
ツ　西風は日暮まで（冬季）
ネ　南風は雨降風で止むことを知らない
ナ　東の風は天気が悪くなる（冬季）
ラ　便所や下水等の臭気の強くなるのは雨の兆

これらを書いているものとして

〃 運機図解〃 宝暦九年（AD一七五九）明月道人著
〃 民用晴雨便覧〃 明和四年（AD一七六七）中西敬房著

等がある。

（これらは、ほとんど確実な理由に基づくものであるから、山において参照されたい。）

ゴシップ

二A　笹田英治

笛吹川遡行の時の話しである。一行の中のイの一番の大食いSがゆ三日目の二十六日に釜沢源流まで腹をへらしてやっとのことでたどりついて夕飯の支度までして何とそれを食べなかったというのである。その理由及又ふるっている。その日の四時頃もう腹がへってうごけないといったHをはげまして源流近くまで来たが、何と自分も腹がへって動けそうもなく、が、こっにいい提案があった。H_2が沢庵をもっていたのであるSは何の気もなくその話に飛びついてH_2と二人して沢庵をぶりくとがぶりながら頑張っていたのである。が何分にものどがかわくので水をのむ、水は沢を歩いているのだからいくらでもある。つめたい水をなんどもこっろゆく迄飲んだのはいいが、沢庵とつめたい水なので消化は悪いし腹はひえる。従って腹の具合が変になってきてついに腹がしくくといたくなって来た。そして食事の南蛮をしたまではよかったのだが、それからはものすごくいたくなって来たので、飯を前に見ながらついに食べなかったのである。たゞSの名誉のためつけくわえておくと提案者のH_2の方がSより少ししか食べなかったが痛み出したのは早くそしてひどかった。が二人とも次の日はケロリとして朝夜の分もとりもどす迄に沢山食べたのであった。そして絶食したのをほこりにすら思っているのである。〃沢庵は山にもって行かないがいい〃と悟ったのと同様に（S記）

金剛杖

三C　笹野幸夫

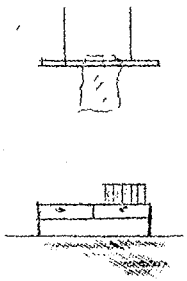
金剛杖は五尺五寸位あるのが普通である、この長さいたって邪魔である。しかるに砂走りを下る時はどうしてもこの長さが必要だそうだ」

登る時或は平らな所を歩く時はすべからく担ぐべし、その時の杖焼印をおすスタンプ帳に等しくなる、だがよく見てみると裏面の六尺棒みたい。汽車に乗る時、何か恥辱に似た感を受けるが、これを巧みに用いると実にゆっくり汽車に乗れる、と云うのは金剛杖を横に持ってホームの最前列に一列に並んでしまうと他人の出入をすっかり遮断……

ナイショ、ナイショこんなことが警察に知れたら　××法違反になる、この杖家に持って帰ってみたが、置き場所に一苦労、記念にと勉強部屋？の隅に立てかけてみたが倒れて来そう、とうく、思いあまった挙句天井から紐で焼印を下にしてつるしてみた。

これは絶好勉強の間々に眺めとげれば思い出ひっぷり、それに物干しになるとは……

―雨男―



ことばとはなし

二E 田中 実

（このほど部で出した調査書内の「部に対する希望意見」欄を読んでみたが、以下それをまとめてみよう。中でも「ダラケ方直し！」とか「ダレテルゾ」と直接どなっている人もいたが、これはあの調査書を水だに出さない約3/5の人が聞くべき最もよい言葉であろう。これに対して「部内統一の為リーダー制をとれ」という意見があるのはもっともだと思う。以上相当強くきたが、これとは別に「度々の部会がざわくしているのに閉口する」と云うおだやか型の人がその最後に「もっと有意義に熱心に」と皆に求めている方が「ダレテルゾ!!」とどなる人よりも部を理解しきった人ではないかと思うが、これにもまして「意見ありません」と書いている人が一番幸福なのではなかろうか？。他の意見として「冬山道具を購入しろ!!」とか「冬山器具買入を強く主張するものなり」と云う放送討論会的な意見が圧倒的であるが、これは誰もが望む最大のものである、と思う。だがしかし、会計の係が予算とにらみ合っているのを考えるとあまり本気で、どなったり、ほえたりしてもらいたくないところであろう。他に二、三「部の活動を広く校内に宣伝しろ!!」と云うのがあったが「好きこそものの上手まれ」等という言葉を引用し更に現在の少人数の一年山岳部員を考えると、発展しつゝある山岳部にも行きづまりを想像し、出来たら部員自ら昔の鳳羽先生の如き山を愛する者を山に誘ひ出してあげたい。）

個人山行

塔ヶ岳

二E 田中 将利

五月二十八日（風雨烈し）
茨沢―大倉尾根―塔ヶ岳（二〇、二〇）
五月二十九日
（主脈を断念）塔ヶ岳―鍋割山―寄木沢―茨沢
〔参加〕 二E田中（将）

滝上谷

二D 村田 博之

六月二十五日 晴
氷川（二三、四〇）―日景（二〇〇）―石山神社（二三〇―四三〇）―カロ谷出合（五三〇）―滝上谷出合（九、〇〇―九、三〇）―二股（一二、〇〇）―滝上谷の頭（一三、三〇―一四、〇〇）―三ツドソケ（一四、三〇）―日景（一六、〇〇）―倉沢（一六、三〇）
〔パーティ〕 二D長崎、村田
〔費用〕西荻―氷川（往復） 百六十円 氷川 バス 倉沢 二十円

上高地・西穂高（前夜発三日）

三A 神島 一郎

七月二十八日 新宿発（二二、〇〇）
七月二十九日
松本（五三〇―五四〇）―島々（六、二〇―六五五）―バス―河童橋（一〇、三五―一一、二〇）―西穂山荘への分岐（一一、四〇）―尾根（一四、〇〇―一四、〇五）―西穂山荘（一四、五）
七月三十日
西穂山荘発（八、三五）―独標（八、五五―九、二〇）―西穂高岳（一〇、一〇―一一、〇〇）―独標（一一、五〇―一二、一〇）―西穂山荘（一二、四〇―一四、五）―上高地分岐（一四、三五）―温泉旅館（上高地）（一五、五五）―白樺荘（一七、〇〇）
七月三十一日

白樺荘発（八、三〇）―上高地明神池寺逍遥―河童橋発（一六、〇〇）バス―島々（八、三〇―八、五四）―松本（一九、三五―一九、三八）

〔参加人員〕　三A神島外五名

〔費用〕新宿―松本（学割便用）往復三百二十円

松本―島々（片道）二十五円、

島々バス河童橋（片道）百二十五円、荷物代二十五円

西穂山荘（米持参三食付）三〇〇円

白樺荘（米持参三食付）　四〇〇円

その他　百円　　合計　千四百七十円

御岳・大岳・神戸岩（日帰り）

三A神島一郎

八月十五日

立川駅（七、三三）―御岳駅（八、二八）―滝本（八、五五）―御岳神社（九、五〇―一〇、三五）―興の院（一一、〇五―一一、三〇）―大岳山（一二、三〇―一三、三〇）―大ダワ（四、三〇）―神戸岩（一五、三〇―一六、四〇）―大沢（七、一〇）―本宿（一八、〇〇―一八、一〇）バス五日市駅（八、三五―一九、一〇）

〔参加人員〕三C高橋、三A神島　他三名

〔費用〕西荻窪―御岳駅（片道）七十円、本宿―五日市バス　三〇円

五日市―西荻窪　五十円　　合計　百五十円

南秋川の旅

三E田中、将判

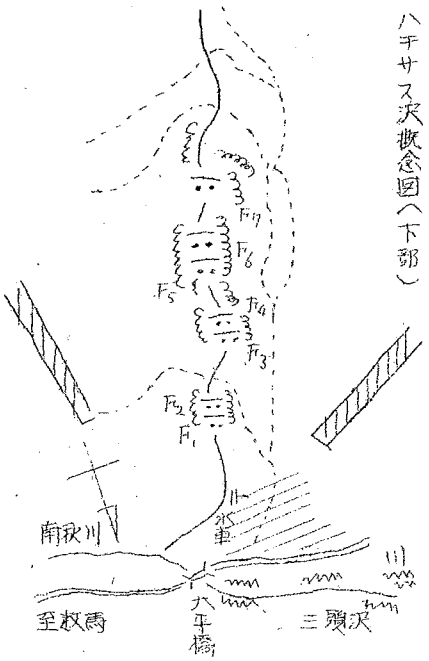
八月十六日（晴）

本宿（九、三五―一二、〇〇）―檜沢の滝（一二、二五―一三、一五）―時改峠（一四、一五）―浅間嶺（一五、一〇―一五、五五）―一本松（一六、五〇―一七、四〇）―船久保分岐（一八、〇〇）―船久保（一九、四〇）―数馬上（九、〇〇）

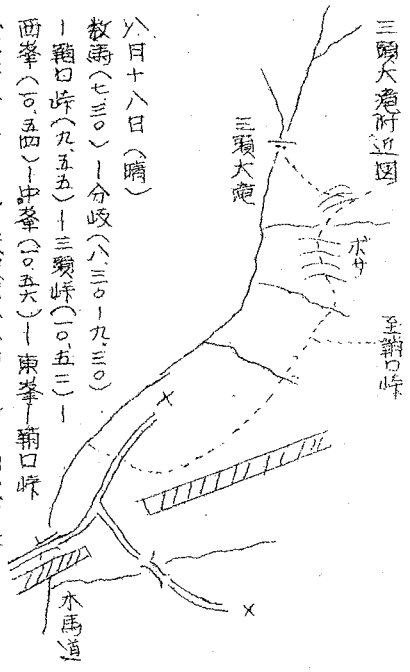
八月十七日（晴）

午后より八王サス沢偵察（タイム無し）

八王サス沢概念図（下部）



三頭大滝附近図



八月十八日（晴）

数馬（七、三〇）―分岐（八、三〇―九、三〇）―鞘口峠（九、五五）―三頭峠（一〇、五三）―西峯（一〇、五四）―中峯（一〇、五六）―東峯―鞘口峠（一一、一五―一三、三〇）―砥沢出合（一四、〇〇）―加茂神社（一四、一五）―日指（一四、二〇）―河内（一四、五五）

〔参加〕　三E田中（将）他三

谷川岳

二F 竹内 章

上野発（二三、三〇）―上牛（五一〇―五二五）―西黒沢入り（五四五）―朝食（五五五 ―六二〇）―白サギの滝（六、二七）―小余場（こゝから水がなくなる）七、三〇）―屋根（八二四）―谷川岳三角点（九二〇）―頂上の小屋（九、二五―九、五五）―田尻沢（一〇、五五）―天神峠（一一、一五）―天神小余通過（一一、四〇）―昼食（一二、〇五―一二、四〇）―浅間神社（一三、一七）

〔費用〕上野―土合（往復）二四〇円　頂上小屋休憩茶代　二〇円

谷川温泉（三時間休息）五〇円　合計　三一〇円

〔参加者〕　二F竹内外三名

大菩薩峠

二F 佐藤信治

田之鉱泉の宿（友人宅）出発（六、二五）―トンネル（六、五五）―天目部落（七、〇五）―嵯峨塩温泉（六、〇五）―南招団（九、三〇）―沢で小休出発（九、四五）―大菩薩館（一〇、〇〇―一〇、五〇）―峠（一一、五〇―一二、二〇）―上日川峠（一二、〇五）―雲峰寺（一四、三〇）―小田原橋（一五、二〇）―塩山（一六、二〇―一六、五一）―初鹿野（七、一五）―田之鉱泉（八、〇〇）

〔費用〕八王子―初鹿野二〇〇円　石黒旅館（二泊）三〇〇円

お茶一〇円

御前山より御嶽、五日市（一泊二日）

二E 田中 実

八月二十三日（曇時々晴）

立川発（七、二三）―氷川（八、四〇）バス（八、五）―八五八）―ホ二段畠（九五六―一〇、〇五）―最後の炭焼小屋（一一、一五―一一、二五）―鍋定路（一二、二七）―御前三角点（一二、〇五―一二、一〇）―大沢、大ダワ分岐（一四、二五）―大ダワ（一五、〇〇―一五、一〇）―大嶽山（一七、〇〇）―山の家（一七、二五―一八、三〇）―アヤヒロの滝（一八、二三）―キャンプ地着（一八、四三）―就床（二〇、一〇）

八月二十四日（曇時々雨）

起床（五五〇）―出発（一〇、二〇）―御嶽神社（一〇、五五―一一、〇五）雨宿り（一二、二二―一三、二五）―鳥居前（一三、五〇）―上養沢（一三、五五―一四、〇〇）―水和田平（一四、三〇）―怒田畑（一四、三五―一四、四〇）雨宿り（一四、五五―一五、二〇）―寺岡（一五、四八）―十里木（一六、〇七―一六、一五）―五日市駅（一七、七―一七、四五）―立川着（一八、五五）

〔参加者〕二E田中実他一名

紙上ガイド

奥秩父の山小屋

二E 田中 実

○三峰山宿泊所（三峰神社）常住、二百人、二食付二百五十円

○雲取小屋（雲取山北方）　常住　百五十人　自炊百円

○笠取小屋（雁峠）七三年新築　（四―十月）番人世人、（百円）

○雁坂峠小屋（雁坂秩父側新道）今年より番人入（百円）世人、水新豊富

○甲武信小屋（甲武信沢東側）夏期番人（百円）五十円水汲に往復十分要す

○大弛小屋（国師岳大地）無人十五人、水新便利冬期不可

○大日小屋（金峯山大日岩下）無人十人床なし冬期不可水豊富

○十文字小屋（十文字峠秩父側一時間下る）無人十五人床枝なし

○柳小屋（甲武信岳東の沢合流点）無人十五人

○荒川小屋（破風屋北麓）無人世人

○梅小屋（雁坂岳中腹）無人世人

○勝縁荘（大菩薩峠姫の井沢源流）常住世人、改修成る、素泊百円位

○大菩薩館（上日川峠東方の沼の窪）常住、四十人素泊百円位

○西御山清滝小屋（日向大谷登山道中腹）無住、百人

○両神山神社（日向大谷）常住八十人、二百円

○三條温泉（後山谷三條谷にあり）廿四年新築本年度より番人常住百円

○金山　有井館素泊百円　○湯富ラジュウム　ラジュウム付二百円

部員名簿

部長　岸田文男先生

部員　三A　神島一郎　立川市柴崎町
C　笹野幸夫　杉並区西荻窪一ノ二〇(39)二〇四三
B　司馬正次　〃　大宮前四ノ四七
F　横川勇　比多摩郎(PTA名誉参照)
H　和才宏二　杉並区阿佐ヶ谷三ノ四七八(39)二五一七
二A　笹田英次　〃　大宮前六ノ三四三
A　山口雄弘　中野区中町一三
A　平沢勇　杉並区井荻町二ノ一五二
B　森沢拓治　武蔵野市吉祥寺一九〇
D　長崎正明　杉並区馬橋四ノ五五一
D　村田博之　中野区本町通五ノ二一
E　鈴木輝夫　杉並区和泉町一五八
E　田中将利　世田谷区北沢二ノ一九二
E　田中実　中野区大和町一八〇(38)八七五
E　中野英司　杉並区馬橋二ノ一五〇
F　佐藤信治　世田谷区代田二ノ六八二
F　平沢一郎　八王子市本郷町二〇(八王子)一一三六
G　鴻池泰夫　杉並区上荻窪一ノ四一(39)一四三二
G　竹内章　中野区本町通三ノ二六
H　今井言　杉並区上通町五
〃　下高井戸一ノ二〇二
〃　高円寺六ノ七〇六
C　曽根茂夫　〃　〃　三ノ二一九
H　野口弘生　〃　馬橋二ノ一九〇

新入部員紹介

一D　加藤鈴夫　杉並区永福町四七
二E　名倉復　世田谷区祖師谷一ノ五六二
H　河合秀明　〃　王川奥沢町一ノ三四〇(02)二八三九

以上九月十五日現在　二十六名

なお、このたび右の三名が入部されましたので旧部員は一層充実全なる。パーティとして後輩を歓迎し、そして新部員は発展する西高山岳部の前に立って活躍される事を御期待いたします。

―山岳部備品―

夫婦(三人用)　二　ザイル(三〇米)　一
山刀　二　ノコギリ　一
カンテラ　二　コソフェル(大型)　一
オイルタンク　一　バーナー　一
書籍　若干

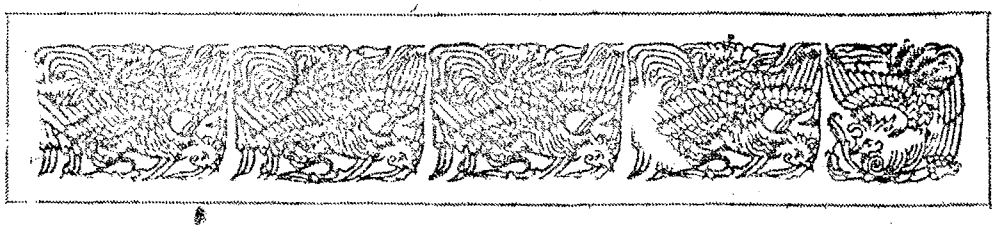
なお部では今迄皆様に不自由がられていた冬山の道具を今秋から少しづつ買集める予定です。又わずかながらの備品ではありますが広く一般の方に使っていただければ幸ひです。　M・T

―各係割当制へ―

今迄は主に笹野・田中(将)の両君によってなされておりました山岳部の運行も今後は新たに左記の如く各係を決定いたしましたので御了承願います。

C.L　笹野幸夫
企画　平沢勇　山口雄弘
記録　野口弘生　田中将利
会計　中野英司
器具　鈴木輝夫
食糧　田中実
編集　森沢拓治

以上



編集

○お忙しい中を御投稿下さった諸兄に対して感謝を致しております。

或る一部の人が提出期日よりおくれて提出されたため編集並びに発行がおくれましたことを非常に遺憾に思っています。

以後提出期日がゆかってゐれば期限迄には、ちゃんと提出してもらいたい。

○毎度のことでおわびしなければならないのですが、非常に紀行文的になりまして何とも申しわけありません

○次号はもっとやわらかく想出特輯に致しますので、報告の他にも紀行文、又は如何なる性質のものでも、ふるって際迄提出して下さるよう

○なにぶんにも、時間がなり上に、又編集員も怠慢でしたため、一部の原稿も次号にまわしたり、皆様の御期待に向かなかったものとまってしまったことを深くおわびして次号に全力をつくしたいと思います。

後記

衍徨

第四号

—非売品—

昭和二十五年九月十五日印刷
昭和二十五年九月二十日発行

編集兼　森沢拓治
発行人　田中実
発行所　都立西高等学校山岳部
東京都杉並区大宮前三ノ一一八
電話　荻窪(39)三一八六